

家庭学習の指導と授業改善を どう結びつけるか

大阪教育大学教授 木原 俊行

1 家庭学習を生かした授業改善の実践的課題

「第2章4節 教師の家庭学習充実と授業との連動の取り組み状況」では、小・中学校の教師が、現在、家庭学習に何を期待し、それをどのように実践しているかについての概略を確認した。ここでは、その内容をさらに掘り下げて、家庭学習を生かした授業改善の実践的課題に迫りたいと考える。

(1) 家庭学習指導力の実践的課題

「学力向上のための基本調査2008」(以下、「基本調査2008」)では、家庭学習指導力の実態を明らかにするために、教師を対象にして「ここ3年間において、あなたが子どもたちの家庭学習の充実に向けて取り組んでいることとして、次のようなことはどの程度あてはまりますか」という問いを投げかけた(全24項目)。「とてもあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の4つの選択肢による回答を4～1までの得点に換算して、教師全体の回答平均値を求め、それが高い項目(5項目)と低い項目(5項目)を抽出した。その結果は、**図表5-1-1**、**図表5-1-2**のようになる。

まず小学校と中学校の実践傾向に大きな違いがあることが分かる。小学校の教師たちは、明らかに「宿題をやってこない子どもや家庭学習が十分でない子どもに対しては、始業前や休み時間、放課後等にやらせるようにしている」といった「プログラムの指導」によく取り組んでいる。また、「毎日かならず今日の授業の振り返りや次の授業への準備をすること等を習慣づけるように指導している」といった「学びの土台作り」に関しても比較的よく取り組んでいる。

しかしながら、中学校の教師たちの回答には、そのような傾向は確認できない。よく実践されている手だてには、「指導の土台作り」や「学習ガイダンス」に属するものが確認される。中学校は、教科担任制を敷いているので、いわゆる教科の独自性に応じて、家庭学習に関する指導にも、自然に多様性が生まれているのか、それとも、それは教師間の意見交換の不足によるものなのか——両方のケースが考えられよう。したがって、中学校では、小学校にもまして、家庭学習の指導に組織としてどのように臨むのかについて、そのポリシーの明確化と周知徹底が必要とされよう。

さらに、小学校の教師たちの家庭学習指導にも、複雑な状況は存在している。例えば、先に、よく実践される傾向にあると述べた「プログラムの指導」の範疇に属する「クラス共通の課題に加えて、子どもの理解状況や興味・関心等に応じた個別的な課題も宿題として用意している」という項目については、「とてもあてはまる」および「どちらかといえばあてはまる」と回答した教師の割合は、50%を下回る。また、「形成的評価と指導」に属

する「家庭学習の成果に対する評価規準や判断基準を明確に示すとともに、成績にしっかりと反映させている」という項目の実践率がかなり低いことをあわせて考えると、「家庭学習の個別化」が小学校教師たちにとっても重要な実践課題になっていると言える。

小・中学校の教師とともに、実践率が低いのは、「本や文章、資料を読み、自分の考えや意見、批評等を書かせて読解力を高めるような課題を宿題として出すようにしている」「校内や教育センターの教材データベースやインターネットサイト等からドリルや教材を入手し、宿題や家庭学習教材として活用している」「家庭学習の意義や役割から、計画の立て方、具体的学習方法、評価規準等をまとめた『家庭学習の手引き』等を作成し、随時活用させている」の3項目である。これらは思考力や表現力の育成、ICT活用、自己学習能力の涵養といった、家庭学習の新しい課題・方法に関係するものである。第2章4節でも述べられているように、高次な学力を育成するための家庭学習の「質的工夫・充実」に、小・中学校の教師たちがいっそう力を注がねばならないことが、こうした整理においても確認された。

図表5-1-1 家庭学習指導力の上位及び下位項目（小学校）

設問のカテゴリー		設問番号	設問	平均のスコア	スコア順位
プログラムの指導 (AT)	放課後等の補充指導	問6-14	宿題をやってこない子どもや家庭学習が十分でない子どもに対しては、始業前や休み時間、放課後等にやらせるようにしている。	3.29	1
プログラムの指導 (AT)	定期的な出題	問6-13	量や頻度にムラがないように、宿題を出すようにしている。	3.28	2
プログラムの指導 (AT)	長期休業中の対応	問6-15	長期休業中には、ふだんやりにくい課題や十分に習熟できていない課題等を優先的に出すようにしている。	3.23	3
学びの土台作り (FS)	学習習慣	問6-1	毎日かならず今日の授業の振り返りや次の授業への準備をすること等を習慣づけるように指導している。	3.06	4
学びの土台作り (FS)	自主的学習	問6-3	教科の特性や子どもの年齢に応じて、自主的・主体的な家庭学習へと移行していけるように指導している。	3.04	5
形成的評価と指導 (NT)	評価規準の明示	問6-24	家庭学習の成果に対する評価規準や判断基準を明確に示すとともに、成績にしっかりと反映させている。	2.41	20
学習ガイダンス (NS)	家庭学習教材の紹介	問6-18	家庭学習教材として適切な教材や方法を保護者や子どもの要望に応じて紹介している。	2.24	21
プロジェクト的指導 (AS)	読解力を育む課題	問6-10	本や文章、資料を読み、自分の考えや意見、批評等を書かせて読解力を高めるような課題を宿題として出すようにしている。	2.17	22
指導の土台作り (FT)	ICTの活用	問6-8	校内や教育センターの教材データベースやインターネットサイト等からドリルや教材を入手し、宿題や家庭学習教材として活用している。	2.14	23
学習ガイダンス (NS)	家庭学習の手引きの活用	問6-19	家庭学習の意義や役割から、計画の立て方、具体的学習方法、評価規準等をまとめた「家庭学習の手引き」等を作成し、随時活用させている。	2.06	24

図表 5-1-2 家庭学習指導力の上位及び下位項目（中学校）

設問のカテゴリー		設問番号	設問	平均のスコア	スコア順位
学びの土台作り (FS)	学習習慣	問 6-1	毎日かならず今日の授業の振り返りや次の授業への準備をすること等を習慣づけるように指導している。	2.99	1
プログラムの指導 (AT)	長期休業中の対応	問 6-15	長期休業中には、ふだんやりにくい課題や十分に習熟できていない課題等を優先的に出すようにしている。	2.91	2
指導の土台作り (FT)	ノート等の活用	問 6-5	授業で使うワークシートの使い方やノートのとり方を工夫し、家庭での予習復習やテスト勉強等に活用するように指導している。	2.88	3
指導の土台作り (FT)	自作教材の作成	問 6-6	市販の教材やドリル等のみに頼らず、自作のプリントや課題等も宿題として出すようにしている。	2.77	4
学習ガイダンス (NS)	家庭学習の相談・指南	問 6-20	子どもたちの家庭学習上の悩みや相談に個別に応じたり、具体的な方法やコツを指導したりしている。	2.74	5
学習ガイダンス (NS)	家庭学習の手引きの活用	問 6-19	家庭学習の意義や役割から、計画の立て方、具体的学習方法、評価規準等をまとめた「家庭学習の手引き」等を作成し、随時活用させている。	2.07	20
プロジェクト的指導 (AS)	読解力を育む課題	問 6-10	本や文章、資料を読み、自分の考えや意見、批評等を書かせて読解力を高めるような課題を宿題として出すようにしている。	2.04	21
プロジェクト的指導 (AS)	対話を促す課題	問 6-11	家族や友人、地域の人たちとの対話や触れ合いを促すような課題や活動を宿題として出すようにしている。	2.00	22
指導の土台作り (FT)	ICTの活用	問 6-8	校内や教育センターの教材データベースやインターネットサイト等からドリルや教材を入手し、宿題や家庭学習教材として活用している。	1.96	23
学びの土台作り (FS)	読書習慣	問 6-2	教師が指定図書のリストを作ったり、子ども自身に目標冊数を決めさせたりして、家庭での読書を習慣づけるように指導している。	1.79	24

(2) 授業連動力の実践的課題

「基本調査 2008」では、授業連動力の実態を明らかにするために、教師を対象にして「ここ 3 年間に、授業や学習指導において、『宿題』を出したり、家庭学習に関する指導を行うに当たって、あなたは、次のようなことをどの程度やっていますか」という問いを投げかけた(全 16 項目)。「とてもあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の 4 つの選択肢による回答を 4～1 までの得点に換算して、教師全体の回答平均値を求め、それが高い項目(4 項目)と低い項目(4 項目)を抽出した。その結果は、図表 5-1-3、図表 5-1-4 のようになる。

小・中学校の教師とも、「定着・習熟」の範疇に入る「授業中に宿題の答え合わせや宿題内容に沿った確認テストをして、つまづき箇所の発見と解消に努めている」が授業連動力のトップを占める。また、「予習・意識付け」に属する「次の授業で学ぶ教科書の内容を読んだり、語句の意味を調べたり、関連する資料を調べておく等、予習する事柄と方法を明確に伝えている」も小・中学校に共通して、実践されている割合が高い。これらの取り組みは、知識・理解を習得させるためのアプローチとして代表的なものであろう。

一方、両校種に共通して実践率が低い項目は、「自主的学習の促進」に位置づけられる「家庭学習として取り組ませている新聞の社説や記事、コラム等のまとめや感想を、朝の

図表5-1-3 授業連動力の上位及び下位項目（小学校）

設問のカテゴリー		設問番号	設問	平均のスコア	スコア順位
定着・習熟	指導と評価の一体化	問10-8	授業中に宿題の答え合わせや宿題内容に沿った確認テストをして、つまずき箇所の発見と解消に努めている。	2.90	1
定着・習熟	教材研究や自作課題開発	問10-5	間違いやすい問題やテストによくでる問題等を精選・体系化した宿題を出している。	2.75	2
予習・意識付け	予習事項の明示	問10-1	次の授業で学ぶ教科書の内容を読んだり、語句の意味を調べたり、関連する資料を調べておく等、予習する事柄と方法を明確に伝えている。	2.71	3
予習・意識付け	点検とフォロー	問10-4	予習ノート等を提出させて点検したり、子ども同士で確認させたりして、宿題を出しっぱなしにしないようにしている。	2.53	4
応用・発展	成果の披露と交流活動	問10-11	家庭学習として取り組んできた探究的学習の成果を発表したり、交流したりする場や機会を定期的に設けている。	2.15	13
自主的学習の促進	継続的自主学習	問10-15	漢字や計算、英語等の自主的・継続的な家庭学習の成果を検定試験等で確かめてみることを推奨している。	2.13	14
自主的学習の促進	学習成果の披露	問10-14	家庭学習として取り組ませている新聞の社説や記事、コラム等のまとめや感想を、朝の会や授業等で発表させている。	2.13	15
応用・発展	基本スキルの指導と実践	問10-10	調べ学習に関わる色々な手法や手順、ICTの活用等を授業で指導し、それを用いて行う宿題（家庭学習課題）を出している。	1.92	16

図表5-1-4 授業連動力の上位及び下位項目（中学校）

設問のカテゴリー		設問番号	設問	平均のスコア	スコア順位
定着・習熟	指導と評価の一体化	問10-8	授業中に宿題の答え合わせや宿題内容に沿った確認テストをして、つまずき箇所の発見と解消に努めている。	2.62	1
予習・意識付け	予習事項の明示	問10-1	次の授業で学ぶ教科書の内容を読んだり、語句の意味を調べたり、関連する資料を調べておく等、予習する事柄と方法を明確に伝えている。	2.53	2
自主的学習の促進	継続的自主学習	問10-15	漢字や計算、英語等の自主的・継続的な家庭学習の成果を検定試験等で確かめてみることを推奨している。	2.46	3
定着・習熟	教材研究や自作課題開発	問10-5	間違いやすい問題やテストによくでる問題等を精選・体系化した宿題を出している。	2.42	4
定着・習熟	作問による学習促進	問10-6	自分で問題を作るような宿題を出し、授業中に子どもに出題・解説させる等家庭学習のやりがいを高めている。	1.84	13
定着・習熟	保護者の関与促進	問10-7	宿題の確認・点検シート等を用意し、保護者の関与を得られやすくしている。	1.84	14
応用・発展	基本スキルの指導と実践	問10-10	調べ学習に関わる色々な手法や手順、ICTの活用等を授業で指導し、それを用いて行う宿題（家庭学習課題）を出している。	1.73	15
自主的学習の促進	学習成果の披露	問10-14	家庭学習として取り組ませている新聞の社説や記事、コラム等のまとめや感想を、朝の会や授業等で発表させている。	1.69	16

会や授業等で発表させている」と「応用・発展」に属する「調べ学習に関わる色々な手法や手順、ICTの活用等を授業で指導し、それを用いて行う宿題(家庭学習課題)を出している」である。これらの取り組みは、思考力や表現力の育成に資するものである。また、例えばICT活用に顕著であるが、学習環境の整備を伴わざるを得ないものである。実施率が低い項目のその他のものの内容を含めて考えると、いっそう明瞭になるが、学力観の転換、それを具体化するための指導法や評価方法の改善を伴う手だてについては、全体として、実施率が低いと言えよう。したがって、家庭学習においてそのような課題への取り組みが必要になるよう、まず授業そのもののスタイルを多様化する必要があるだろう。

なお、中学校の教師たちの授業連動力は、小学校の場合に比べて、複雑な実態を示している。例えば、「定着・習熟」に属する「指導と評価の一体化」の実施率は高いが、同じ範疇に属する「作問による学習促進」や「保護者の関与促進」については、逆の傾向を示す。これも第2章4節にて言及されているように、教科担任制、受験科目であるか否かの違い等によって、中学校の教師たちの回答に幅が出てくることがその要因であると、推察される。

(3) 家庭学習指導力・授業連動力・教師の指導力(FAN)のバランス

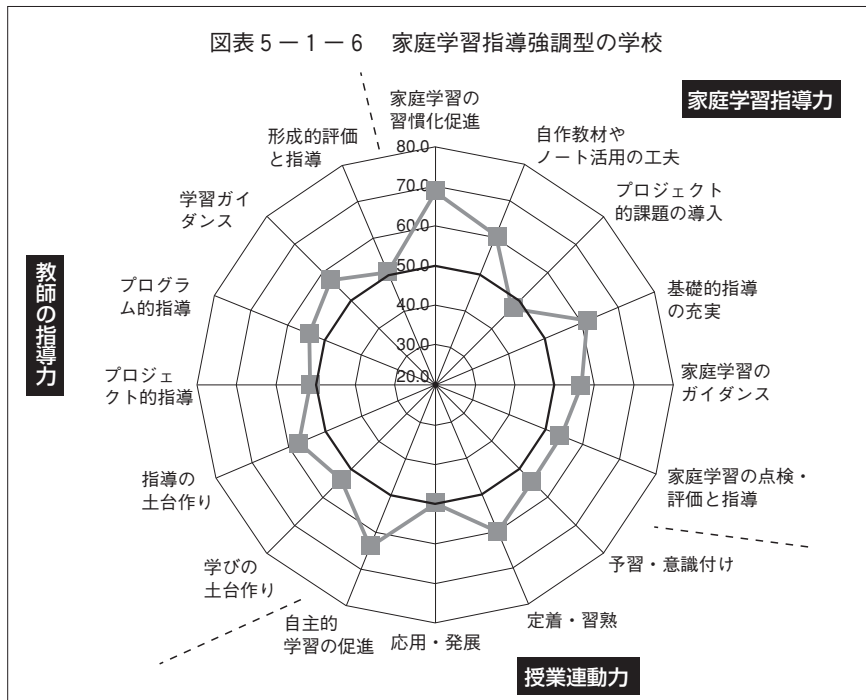
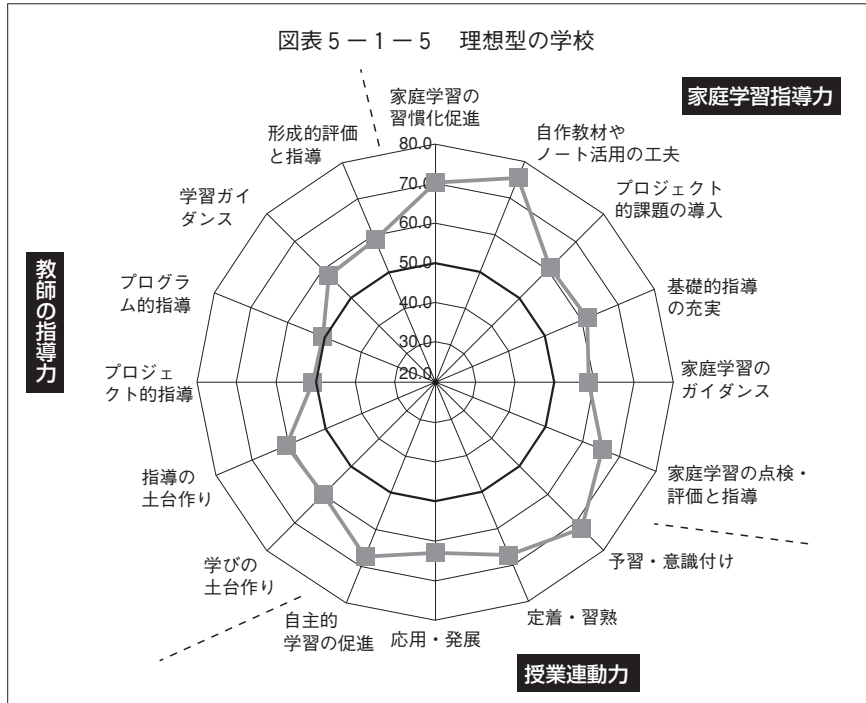
家庭学習指導力、授業連動力、教師の指導力(FAN)の三者には、どのような関係があるのだろうか。第3章で述べられているように、統計的には、三者の間に、ある程度の相関が確認されている。ここでは、家庭学習指導力を含む、教師の指導の全体像を、レーダーチャートを用いてさらに鮮明にしてみたい。

家庭学習指導力は、家庭学習の習慣化促進、自作教材やノート活用の工夫、プロジェクト的課題の導入、基礎的指導の充実、家庭学習のガイダンス、家庭学習の点検・評価と指導の6つの領域で構成される。また、授業連動力は、予習・意識付け、定着・習熟、応用・発展、自主的学習の促進という4つの領域から成る。そして教師の指導力(FAN)は、学びの土台作り、指導の土台作り、プロジェクト的指導、プログラムの指導、学習ガイダンス、形成的評価と指導という6つの領域で構成されている。

教師たちの回答を前述したような手順で得点化し、学校単位で平均値を算出し、それを偏差値に換算した。そして、カテゴリーごとの偏差値を頂点とする、16角形の図形を描いてみた。

面積が大きいほど、授業、家庭学習、そして両者の関連に対する手だてが充実していることになる。

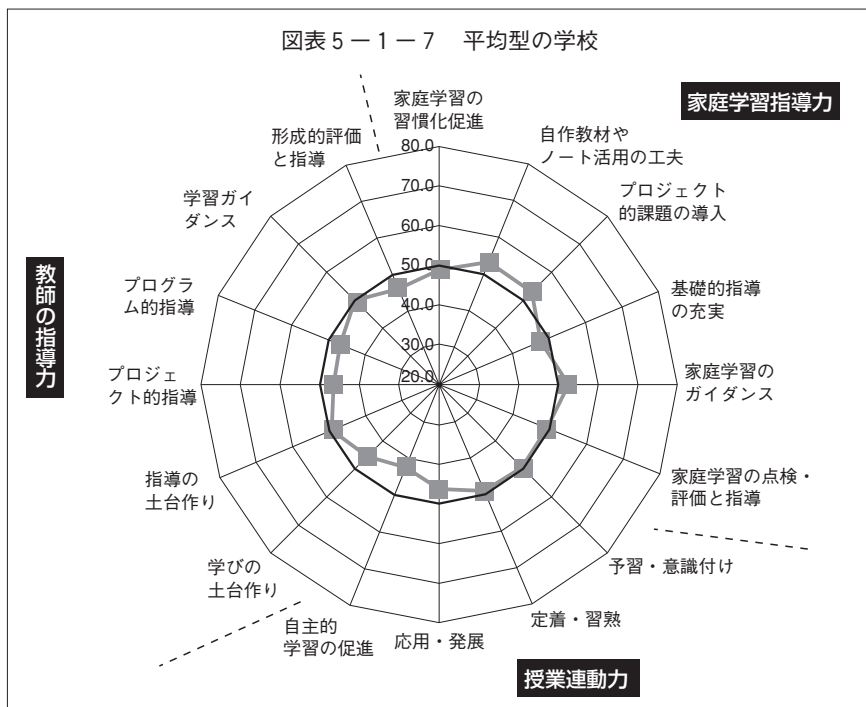
レーダーチャートの形に注目してみよう。まず、その数は限られているが、いくつかの学校の教師たちの回答をチャート化すると、その形は、大きな円に近い(理想型)。図表5-1-5の学校の場合、16の要素のすべてが平均を上回っている。このような学校の教師たちの指導は充実しており、その結果、子どもたちの学力も高い傾向にある(一部



の学校を除く)。例えば、図表5-1-5の小学校の場合、国語・算数の学力調査の総合点の偏差値は、59.3である。

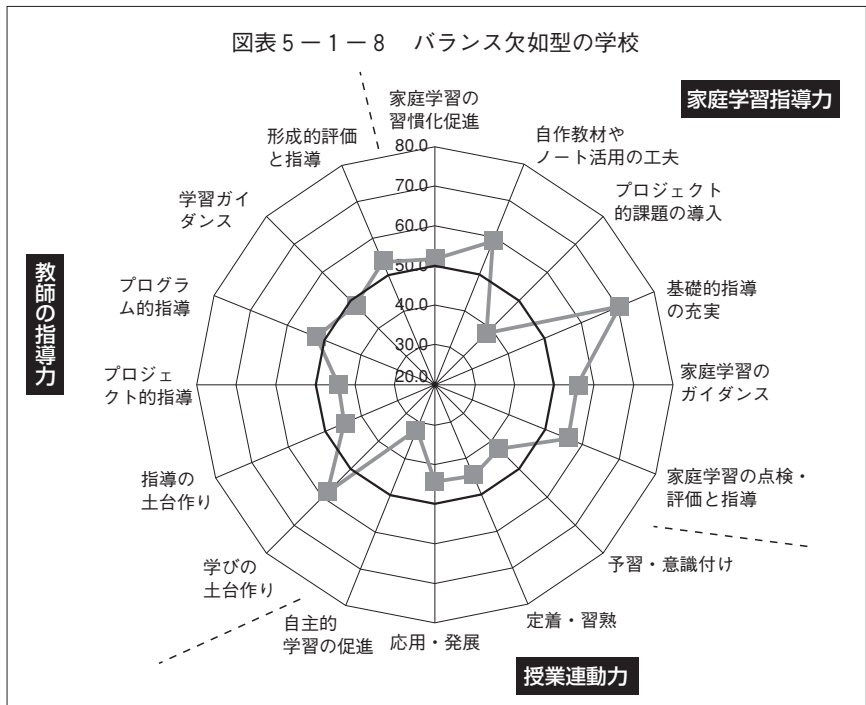
次いで、図表5-1-6のように授業連動力や教師の指導力(FAN)に比べて、相対的に、家庭学習指導力が強調されているケースを確認できる(「家庭学習指導強調型」)。特に、「家庭学習の習慣化促進」部分が突出する場合が目立った。このタイプの学校については、理想型の学校とは異なり、必ずしも、指導を受けている子どもたちの学力は高くない。

ケース数が最も多かったのは、「平均型」と呼べるものである。図表5-1-7に示される。家庭学習指導力、授業連動力、教師の指導力(FAN)のいずれもが、平均値に近い。授業における指導と家庭学習の促進についてそれなりの取り組みをしているとも言えるが、いっそうの工夫が期待されるとも言える。なお、このタイプにあてはまる学校の子どもたちの学力は、高い場合も、低い場合もあり、様々である。教師の指導以外のファクターによって、それが規定されていると推測しうる。

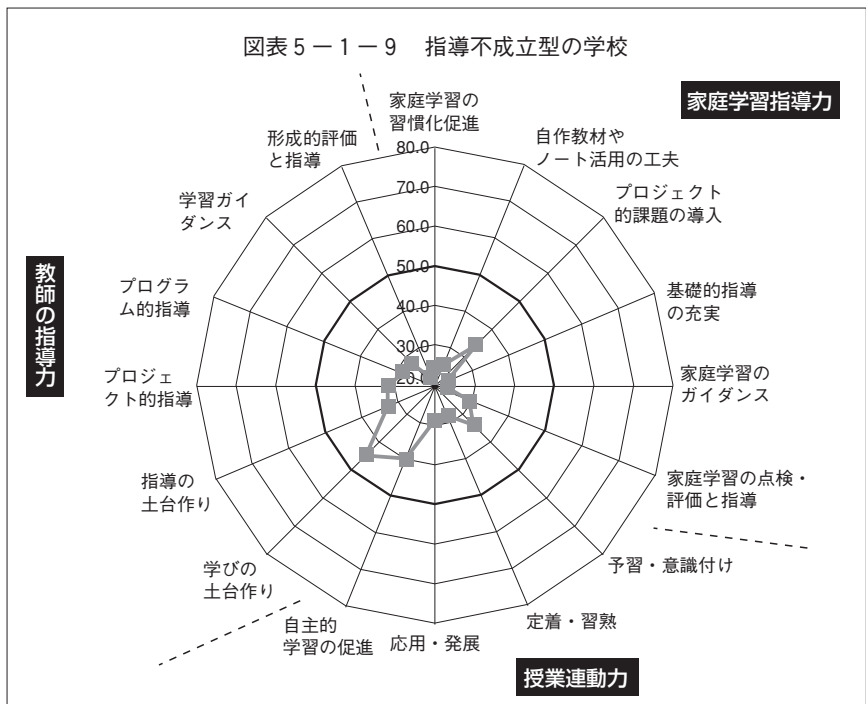


また、「バランス欠如型」と呼びうるレーダーチャートを描く学校も少なくない。換言すれば、ある要素については平均値を上回る高い得点を示すが、同時にその逆の要素も存在する場合である。図表5-1-8は、その代表例である。家庭学習指導力であれば、「自作教材やノート活用の工夫」「基礎的指導の充実」については、かなり高い偏差値を示す。ところが、「プロジェクト的課題の導入」の偏差値は40を下回る。教師の指導力(FAN)であれば、「学びの土台作り」の偏差値は高く、「指導の土台作り」は低いといった具合である。

これらの学校の子どもたちの学力は、概して、高くない。教師の指導にバランスが重要であることを、このタイプの学校の子どもたちの学力が物語っている。



最後に、「指導不成立型」にあたるケースである。家庭学習指導力、授業連動力、教師の指導力(FAN)のいずれの要素の得点も、平均値を下回り、それらの改善が焦眉の課題となっている、あるいはそれに等しい学校である。図表 5-1-9 は、これに該当する学校のレーダーチャートである。言うまでもなく、こうした学校の子どもたちの学力は低い。



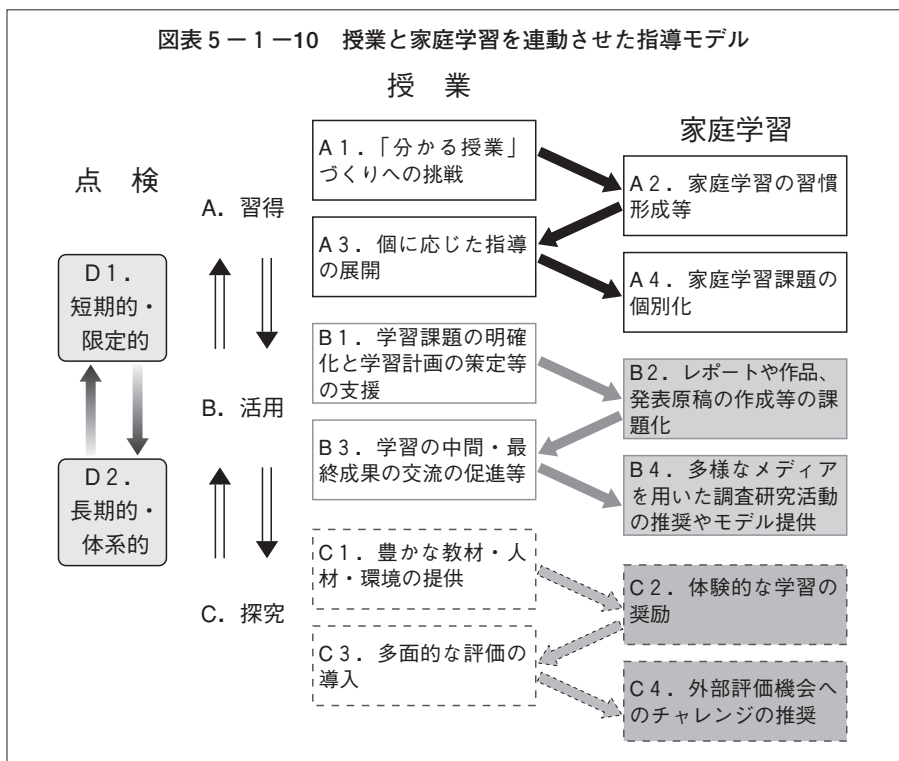
以上のような結果から、家庭学習指導力、授業連動力、教師の指導力(FAN)に関わるすべての要素を満たすのが難しいことが分かる。けれども、特に「バランス欠如型」の学校の子どもたちの学力実態から、特定の指導に依存しても、子どもたちの学力向上が実現しないことは明瞭である。換言すれば、家庭学習に関する指導についても、多様な方法の採用、その使い分けを教師たちは志向すべきであると言える。

2 家庭学習指導と授業改善の進展モデル

本項では、家庭学習指導と授業改善の関係を示唆したいと考える。それは、これまで検討してきた、家庭学習指導力、授業連動力、教師の指導力(FAN)の連結の具体像を示すことに他ならない。

授業改善と家庭学習指導は、図表5-1-10のような3層に及ぶ、円環的な関係で説明されよう。これは、いわゆる「習得」「活用」「探究」という、新学習指導要領でその実施が期待されている、3つのタイプの授業像を柱とするものである。また、授業改善と家庭学習指導の充実の連動や習得・活用・探究の往還を実現し、それを発展させるために、「点検」(例えば学力調査等)をもうひとつの柱に設定していることを特徴とする。

各タイプ等のポイントを、実践事例をひもときながら解説してみよう。



(1) 「習得」における授業改善と家庭学習指導充実のサイクル

知識・理解の確実な獲得、その徹底を図るための「習得」には、どのような授業改善と家庭学習指導の充実、そして両者の連動が期待されるであろうか。

まず、子どもたちが家庭学習に臨む気持ちを抱くためには、いわゆる「分かる、できる」瞬間が授業において生まれていることが前提となろう。つまり、A1.「分かる授業」づくりへの挑戦が家庭学習指導の充実の大前提となる。45分や50分の授業のどこかに、子どもが「なるほど」「そうやればよいのか」といった思いを抱ける状況を創造するために、教師は何をすべきであろうか。その方法は多岐にわたる。例えば、写真5-1-1は、ノートの活用という伝統的な指導とICT活用という新しい方法を併用しているケースである。具体的な方法はさておき、教師たちの「分かる授業」づくりを実現するための工夫、その蓄積は、既述したような「分かった、できた」という場面の成立を経て、必ずや子どもたちの家庭学習に対する意欲を喚起するであろう。



写真5-1-1 伝統的な指導と新しい方法を組み合わせた「分かる授業」づくり

子どもたちの家庭学習に対する意欲は、その継続・維持が図られることが望ましい。すなわち、A2. 家庭学習の習慣形成等に、教師たちは着手すべきだ。その方法は、1つは、ドリルや音読(復習)、語句調べ(予習)等を定期的に課すことであるし、これは、多くの学校の教師たちが既に取り組んでいることであろう。習慣形成のために、その点検に対する協力を保護者に要請することも珍しくはあるまい。

家庭学習の習慣形成に資する、もう1つの方法は、「自由帳等の導入と展開」である。ドリル等の決められた内容をこなさせるだけでなく、子どもに自らの必要性や知的好奇心に応じて、主体的に学習内容を定めさせ、その過程や成果をノート等に残させ、それを教師に提出させるという手順を踏ませるのである。そうした自主的な学習を推奨するために、自由帳のページ数・冊数をグラフ化して掲示したり、それを表彰する制度を導入したりしている教師もいる。

子どもたちの学習習慣が一定程度確立したことを追い風にして、多くの学校では、習得型の授業づくりを成熟させる。それは、いわゆる「個に応じた指導」の実現である(A3. 個に応じた指導の展開)。本研究会で用いる用語であれば、それは、「プログラムの指導」の整備を意味する。

さて、少人数指導や習熟度別指導の実施は、家庭学習指導のいかなる改善を要請するだろうか。それは、個に応じた家庭学習の実施である(A4. 家庭学習課題の個別化)。例えば、習熟度別指導では、コースによって学習する内容や進度が異なるのだから、同じクラスでも、家庭学習課題にレポーターが生まれるのは、自明である。

また、これには、放課後の補充指導等も含まれよう。習熟の程度が十分ではない子どもたちは、家庭において1人で学ぶことを苦手とする場合も少なくない。やる気はあっても学ぶ方法が分からない、誤答の問題点を理解できない等の状況に陥った時に、導いてくれる人材、励ましてくれる存在を彼らは求めるであろう。既に、教育行政等の支援を得て、補充的な学習実施のための人材を確保し、その量的・質的充実を図っている学校がたくさん存在する。

(2) 「活用」における授業改善と家庭学習指導充実のサイクル

「活用」とは、子どもが、身につけた知識や技能を、他の問題に応用したり、異なる文脈に適用したりする営み、具体的には観察・実験やレポートの作成、論述などの学習活動を指す。それを通じて、思考力や表現力、それらが連結された読解力等が育まれることが期待される。活用型の授業とは、本研究会が用いる概念としては、「プロジェクト的指導」の展開に該当しよう。

「活用」では、「習得」に比べて子どもたちの主体的な取り組みが増えるので、まず単元の導入時に、子どもたちに、学習の見通しをしっかりと持たせることが大切になろう(B1. 学習課題の明確化と学習計画の策定等の支援)。具体的には、学習課題の明確化と学習計画の策定、評価規準の確認等の場面で授業に必要とされよう。さらに、先輩の作品例や取り組みの記録を示して、学習のゴールやプロセスのモデルを提供することが望まれよう。

さて、観察・実験やレポートの作成等は、言うまでもなく、時間を要する。したがって、授業中にそれらを完成することは、多くの場合、期待しがたい。そこで、活動の一部あるいはかなりの部分を家庭学習でまかなうケースが生まれる(B2. レポートや作品、発表原稿の作成等の課題化)。もちろん、子どもたちがまったく独自にそれをこなすことは難しい。それゆえ、前述したような学習課題の明確化や学習のゴールやプロセスのモデル提供がますます重要になってくる。また、作業を進めやすいようなワークシート類、例えばレポートの内容や構成の検討シートなどが子どもに提供されることが望まれる。そして、それらの成果は、授業中において学習の中間・最終成果の交流を成立させ、また充実させることになろう(B3. 学習の中間・最終成果の交流の促進等)。写真5-1-1-2は、ある小学校の6年生の子どもが、社会科において、日本と外国の共通性や異質性を意見文にまとめ、発表している様子である。



写真5-1-2 多様な資料を利用して意見文を作成し、発表する様子

さらに、活用型学習のあるものでは、その内容が教科書の範囲を超えたり、その教材として地域の事例が用いられたりするだろう。それは、子どもに、多様なメディア(例え

ば新聞、インターネット等)を活用した調査研究活動の展開を求める(B4. 多様なメディアを用いた調査研究活動の推奨やモデル提供)。課題によっては、「探究」において期待されるようなフィールドワークが実施されるかもしれない。

(3) 「探究」における授業改善と家庭学習指導充実のサイクル

「探究」とは、子どもが、各教科等で習得した知識・技能を教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題の解決に役立つ取り組みである。新学習指導要領では、主として、「総合的な学習の時間」における取り組みが想定されている。「探究」においては、「活用」以上に、子どもの主体的な活動、特に問題解決的な活動が繰り返されるべきだ。それゆえ、「探究」においても、「活用」において有効とされる指導、例えば「学習課題の明確化と学習計画の策定等の支援」等の手だては採用されるべきだ。また、「活用」において望まれた家庭学習、例えば「レポートや作品、発表原稿の作成」等の活動も、当然、尊重されるであろう。

それらに加えて、「探究」では、教科等の枠を超えた課題が設定されるため、子どもたちがそれに取り組むための動機がなおいっそう高められる必要があるし、その際に必要とされる教材や道具、情報がさらに豊かに提供される必要もあろう(C1. 豊かな教材・人材・環境の提供)。そして、家庭学習では、授業における課題解決の取り組みを補ったり、深めたりする営みが望まれる。特に、土曜日や日祝祭日、長期休業期間中等に、学校外の施設を訪問する、地域の社会教育プログラムに参加する等の体験的な学習に取り組むことが期待されよう(C2. 体験的な学習の奨励)。

ところで、「探究」の営みをテスト等の量的な尺度を用いて評価することはできない。その方法は、作品やパフォーマンス、プレゼンテーション等によるものがむしろ支柱となろう。評価主体も多様化せざるを得ない。自己評価や相互評価、外部の人材による評価を重ねて、探究の営みの可能性と課題を明らかにしていくことになろう(C3. 多面的な評価の導入)。写真5-1-3は、国語と総合的な学習の時間の活動を連動させて、地域の方々に子どもたちが伝統文化について聞き取りをし、それを説明文にしたためたものを発表して、評価を受けている様子である。

なお、探究の成果は、学校教育以外の舞台上で評価されることが望まれる場合も少なくあるまい。例えば、競技会やコンテスト、展示(展覧)会や演奏会、検定試験や資格試験等で「腕試し」されたり、審査されたりしてもよろしくろう(C4. 外部評価機会へのチャレンジの推奨)。



写真5-1-3 学習課題の確認(左)と外部人材からの評価を受ける様子(右)

(4) 習得・活用・探究のサイクルと家庭学習の充実

習得・活用・探究は、子どもの学力向上に対して、互いに矛盾する存在ではない。むしろ、相補的、相互作用的な関係を築くべきである。例えば、尼崎市立七松小学校の教師たちは、習得や活用の必然性を探究の過程を通して子どもに実感させるという単元構想を重視して、国語の授業づくりを推進している。⁽¹⁾写真5-1-4は、その事例である。この学習では、第5学年の子どもたちが、総合的な学習の時間で、人と自然の関係を1年間にわたって、追究している(「探究」)。そのゴールの1つが、他学年の子どもや幼児、中学生たちをオーディエンスとして招く発表会である。第5学年の子どもたちは、発表会を成功させるためには、聞き手の特徴を踏まえて、発表の内容構成や表現を工夫しなければならないことを意識する。それには、どのようなレポーターがあるのか等を教師に教えてもらう(「習得」)。そして、発表の構成を練り上げるための準備に励む(「活用」)。さらに、こうした学習を、朝の会における1分間スピーチなどの多様な言語経験、掲示や展示等の工夫に代表される言語環境の充実が促し、支えている。つまり、これらの学習の全体像は、図表5-1-11に示したような構造を有している。

「習得」「活用」「探究」の関係は、その他にも、いくつかのものが考えられよう。⁽²⁾⁽³⁾しかし、いずれにしても、3者の関係が整えられると、子どもたちは、「習得」のための家庭学習についても、その意義を実感できよう。それゆえ、いっそう熱っぽく、家庭学習に取り組んでくれよう。そうした意味で、習得・活用・探究のサイクルの成立と家庭学習の充実にも、ある種の共鳴を見いだすことができよう。



写真5-1-4 リアルな文脈の設定(左)とそれに基づく活用型学習＝レポート作成(右)

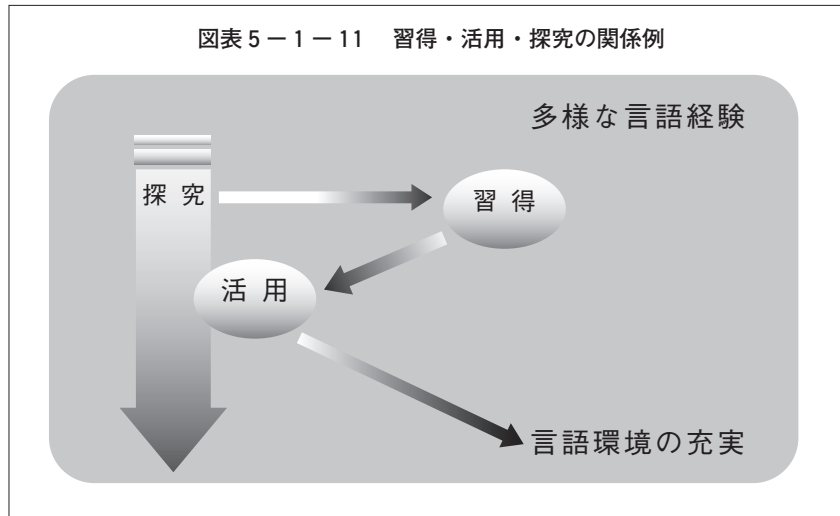
(5) 多元的な点検の実施

これまで述べてきたように、習得・活用・探究という学習場面の成立には、授業、家庭学習のそれぞれに関して、為すべきことがたくさんある。ただ、時間やリソースには限界があるので、それらには、当然、優先順位があろう。

それゆえ、授業と家庭学習を連動させた指導モデルには、「点検」作業が欠かせない。それは、D1. 短期的・限定的なものD2. 長期的・体系的なものに大別されよう。また、それぞれに関して、子どもが自身の学びをモニタリングする場合と教師が自らの指導をチェックする場合に分けられよう。

まず、短期的・限定的なものについては、子どもの側では、例えば、毎時(単元)の学習

図表5-1-11 習得・活用・探究の関係例



過程・成果に関する自己評価、テストの見直し等がその代表となろう。指導者の側では、子どもや同僚による授業評価に象徴されよう。

長期的・体系的なものについては、子どもは、教科の学力調査結果の自己診断、総合的な学習の時間で作成しているポートフォリオの整理等に従事すべきだ。一方、教師たちは、自らの指導に関する教育力調査の結果分析、実践研究の過程と成果の文書化(例えば研究紀要の作成や学校ホームページでの公開等)にたずさわるとよろしかろう。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

なお、「点検」は、そのためのプランや指標の存在と精練を欠いては、成り立つまい。例えば子どもの場合であれば、学習過程・成果に関する自己評価は、その時間や単元の学習計画と評価規準や判断基準に即して、進められることになろう。また、学力調査結果の自己診断の場合であれば、それは、年度始めに策定する成績アップの目標とそれに至るための勉強プランに照らして、営まれることになろう。紙幅の都合上、詳細の言及は避けるが、教師たちも同様に、学力向上のためのプランや指標を活用して、点検作業にいいねいに取り組むべきである。

さらに、「点検」は、子どもの学力向上に関わりを持つ関係者、つまり、子ども自身、教師、保護者、地域の協力者、教育行政の「対話」を喚起し、また豊かにするために用いられるべきだ。学力向上への取り組みは、総合的なものである。家庭学習の指導についても、その方法は、前述したように、極めて幅広い。したがって、その可能性と課題の検討、優先順位の決定は、そう簡単ではない。また、関係者の協力によって、新たな方法を導出できる余地もある。それゆえ、教師たちは、子どもや教師の点検結果をより多くの関係者に開示し、それらの人々との対話を通じた、新たな授業改善、家庭学習指導の充実を図るべきだ。

3

家庭学習を生かした授業改善のさらなる点検

—家庭学習指導の評価基準—

先に、教師たちが、自らの授業における指導や家庭学習に関する指導を点検するためには、プランや指標を参照することが大切であると述べた。ここでは、後者の指標について、さらに解説しておきたい。

筆者は、教師たちの指導力について、これまで、いくつかの指標を用意してきた。例えば、読解力の育成に資する教師たちの営みを「日常的な学習指導」「教育環境の整備・充実」「学校基盤のマネジメント」の3つの領域からなる31項目に整理し、各項目に関して「努力を要する状況」「おおむね満足できる状況」「十分満足できる状況」の3つのレベルを準備した。⁶⁾ それによって、教師たちが、読解力育成の取り組みをいっそういねいに評価できるからだ。「読書活動」に関する指導についてであれば、「各教科等の『必読書』や『参考図書』などを子どもに示している」状況と「各教科等の『必読書』や『参考図書』などを活用せざるを得ない授業を実施したり、家庭学習課題を設定したりしている」状況では、読書活動に関する指導の成熟に大きな違いがある。後者は、前者に比べて、子どもたちの取り組みが活性化するに違いあるまい。

以下、「家庭学習指導力」と「授業連動力」の項目のうち、小学校の教師たちの間で比較的实施率が高かったものに関して、そのような基準試案を示しておこう。例えば、家庭学習指導力の「D. 学習習慣」であれば、「音読やドリルを課すことに終始している」場合、それだけでは、家庭学習に対する子どもたちの意欲を維持することが難しいので、「1. 努力を要する状況」にあると言わざるを得ない。

「毎日かならず今日の授業の振り返りや次の授業への準備をすること等を習慣づけるように指導している」のであれば、それは、子どもたちに家庭学習の意義や必要性を納得させることに資するので、「2. おおむね満足できる状況」に達していると判断されよう。そして、それらに加えて、「教科学習の育成に資する、楽しい学習課題や活動を導入して、学ぶ習慣を自然に体得させている」のであれば、それは、習熟の程度が低い子どもたちの取り組みをも促す可能性を有しているので、「3. 十分満足できる状況」に至っていると見えよう。例えば、写真5-1-5は、ある小学校の低学年の教室の掲示である。このクラスでは、お菓子のパッケージを集めて、それを利用して教室を飾るプロジェクトに子どもたちを従事させ、そのような活動を通じて、カタカナに親しませたり、言葉の成り立ちに興味を抱かせたりしている。



写真5-1-5 子どもたちの意欲を喚起する家庭学習課題

図表5-1-12 家庭学習指導力の評価基準試案(一部)

項目	1. 努力を要する状況	2. おおむね満足できる状況	3. 十分満足できる状況
A. 放課後の補充指導	宿題をやっていない子どもや家庭学習が十分でない子どもの存在を把握していない。	宿題をやっていない子どもや家庭学習が十分でない子どもに対しては、始業前や休み時間、放課後等にやらせるようにしている。	始業前や休み時間、放課後等の補充指導の担当者(教師、アシスタント、ボランティア等)を配置している。
B. 定期的な出題	宿題の量や頻度に関して、方針が教師内、教師間で定まっていない。	量や頻度にムラがないように、宿題を出すようにしている。	宿題の量や頻度に関して、子どもの学力実態を踏まえた個別化が取り入れられている。
C. 長期休業中の対応	長期休業中の家庭学習に関する検討がなされていない。	長期休業中には、ふだんやりにくい課題や十分に習熟できていない課題等を優先的に出すようにしている。	学力実態データや学習記録を活かして、長期休業中の家庭学習のプランを子ども自身に策定させている、その相談にのっている。
D. 学習習慣	音読やドリルを課すことに始めている。	毎日かならず今日の授業の振り返りや次の授業への準備をすること等を習慣づけるように指導している。	教科学力の育成に資する、楽しい課題や活動を導入して、学ぶ習慣を自然に体得させている。
E. 自主的学習	自主的な学習の意義を説いていない(教師が宿題を出したり、課題を与えるだけになっている)。	教科の特性や子どもの年齢に応じて、自主的・主体的な家庭学習へと移行していきけるように指導している。	自主的な学習のための手引き書を提供したり、それに関する相談システムを構築している。

図表5-1-13 授業連動力の評価基準試案(一部)

項目	1. 努力を要する状況	2. おおむね満足できる状況	3. 十分満足できる状況
F. 指導と評価の一体化	授業中に宿題の答え合わせや宿題内容に沿った確認テストがほとんど実施されていない。	授業中に宿題の答え合わせや宿題内容に沿った確認テストをして、つまづき箇所の発見と解消に努めている。	授業中に宿題の答え合わせや宿題内容に沿った確認テストを実施して、それを記録に残し、評価・評定に用いている。
G. 教材研究や自作課題開発	宿題の内容に対する吟味がほとんどなされず、音読やドリル、業者のプリント等に依存している。	間違いやすい問題やテストによくでる問題等を精選・体系化した宿題を出している。	子どもの学力実態を踏まえて、それに応じた問題を作成し、提供している。
H. 予習事項の明示	予習の意義が説かれず、その方法も指導されていない。	次の授業で学ぶ教科書の内容を読んだり、語句の意味を調べたり、関連する資料を調べておく等、予習する事柄と方法を明確に伝えている。	予習の成果を生かした授業展開が採用され、授業の効率化が進むと同時に、予習の大切さを子どもに実感させている。
I. 点検とフォロー	宿題をやらせっぱなしにしている(機械的に印鑑を押すような形での点検に終わっている)。	予習ノート等を提出させて点検したり、子ども同士で確認させたりして、宿題を出しっぱなしにしないようにしている。	予習の努力を全員の前で称揚したり、それを評価・評定に加味したりしている。

注記

- (1) 尼崎市立七松小学校『国語科授業研究 自主発表会 学習指導案集』2008年
- (2) 吉崎静夫『活用型学力が育つ授業デザイン』ぎょうせい、2008年
- (3) 千代田区立番町小学校『自分の考えを創り出す児童の育成 習得・活用・探究を重視した理科・生活科の指導』2008年
- (4) 田中博之・木原俊行・大野裕己(監)『総合教育力の向上が子どもの学力を伸ばす一学力向上のための基本調査2004』ベネッセ教育総研、2005年
- (5) 拙著『教師が磨き合う学校研究』ぎょうせい、2006年
- (6) 田中博之・木原俊行・大野裕己(監)『「読解力」を育てる総合教育力の向上にむけて一学力向上のための基本調査2006』Benesse 教育研究開発センター、2007年